

人工超知能時代の教育的使命

上野 正雄 明治大学学長

出典 [『大学時報』2026 年 5 月号 \(No.428\)](#) 発行：一般社団法人日本私立大学連盟

※転載許諾を得て掲載しています。

1. 知能の此岸と彼岸

我が家には、8 歳になる雌の小型犬がいる。座敷犬として、日々を泰然自若と過ごす彼女は、驚くほどに聡明だ。彼女は、人間が発する言葉を理解するだけでなく、こちらの微細な表情の変化や、室内に漂うわずかな緊張感さえも敏感に察知する。散歩に行きたいとき、静かにリードの前に座り込み、真っ直ぐにこちらを見つめて意志を表明する。気分が乗らなければ、聞こえない振りを決め込む。そこには、単なる条件反射を超えた、明らかな「個」としての意志と感情がある。

しかし、大いに残念ながら、私たちの間には決定的な断絶がある。彼女が散歩の道すがら、夕焼け空を見上げて「なぜ空は青く、そして夕暮れには赤くなるのか」を語ってくれることは、万に一つもない。彼女の知能は、あくまで「今」「ここ」における生存と共感の場にのみ存在し、普遍的法則や抽象的概念を操作する言語的知能とは、その種類を異にしているからだ。

人間は 1 万年以上の長きにわたって、この愛すべき隣人を知能ある存在として傍らに置いてきた。ところが今、人間を取り巻く知的存在の環境が、一変しようとしている。AI という、かつてのいかなる隣人とも異なる知能の出現である。

ところで、私は世の中を数式よりも言葉の眼鏡で捉えたい人間だ。だから、もし将来、彼女が突如としてレイリー散乱の原理を整然と語り始めたとしても、俄かには理解できず、戸惑うばかりに違いない。そんな“非理系人材”である私が、これからの AI を語ることには、専門家から見

れば看過し得ない誤謬^{ごびゅう}が含まれている恐れがある。その点は、教育の未来を案ずる一人の徒の越境行為として、あらかじめ寛恕^{かんじょ}を賜りたい。

2. 「権利自由、独立自治」の原点

教育の使命とは何か。その問いに立ち返る時、私が籍を置く明治大学の建学の精神「権利自由、独立自治」は、時代を超えて鋭い示唆を与えてくれる。

本学が産声を上げた 1881 年は、日本が近代国家への脱皮を図る激動のさなかにあった。自由民権運動の熱風が日本列島を席卷し、封建制の軛^{くびき}から解き放たれた人々が、新しい「個」のあり方を模索していた時代である。岸本辰雄、宮城浩蔵、矢代操、この 20 代の創立者たちは、急進的な社会変革の中で、国家の単なる歯車ではない主体的な個人の育成を急務と考えた。当時の日本において、個人は依然として国家という巨大な器の中の、名もなき構成要素に過ぎない存在であった。そのような歴史的文脈において「権利自由」を掲げることは、単なるスローガンの域を超えた、抵抗の宣言でさえあった。それは、個人が国家権力の客体として統治される存在ではなく、自らの意志で運命を切り拓き、社会を構成する主体であることを高らかに表明するものであった。ここで言う「権利自由」とは、勿論、単なる我儘や放縦を意味しない。それは、思想、信条、言論、そして学問の自由といった、個人が個人としての尊厳を保つために不可欠な自己決定権である。同時に、その真の自由とは他者の自由を尊重する責任と表裏一体であるという重しを伴うものである。つまり、これは、近代立憲主義の精神に深く根ざし、権力の肥大化を峻拒し、個人の尊厳を相互に守り抜くという決意の表明なのだ。

一方の「独立自治」は、内なる精神のあり方を指し示している。学問とは權威^{おもね}に阿^{おもね}るための道具ではなく、冷徹な理性と飽くなき批判精神によって営まれるべきものである。外部から与えられたドグマや時代の流行という名の正解を鵜呑みにすることなく、それらを自らの思索という

るつぽ
垣塙で溶かし、再構築する自律的態度。それこそが自治の本質である。大学とは、そのような不屈の精神を育む揺籃であり、情報や権威に流されない強い「個」を育てる共同体である。

本学の理念である「『個』を強くする大学」は、この 1881 年来の熱量を現代的にアップデートしたものである。強い「個」とは、他者を排除する独善的な強さではない。多様な価値観の荒波に身を投じながらも、安易な同調圧力に屈せず、自らの判断に全責任を引き受ける。情報が洪水のように溢れ、スマートフォンの検索一つで最適解（らしきもの）が提示される現代において、なおも自ら問いを立て続ける力。それこそが、明治大学の教育が目指すところなのである。

3. 超知能の地平

この「個」の自律という理念を、現在進行形で進展する汎用人工知能や人工超知能の時代に照らし合わせるとき、見えてくる地平は一変する。

ディープラーニングの父と称されるジェフリー・ヒントンは、近年、自らが切り拓いた AI の進化が、人間の制御可能な限界点を超えつつあることに強い危機感を表明している。彼は、AI が膨大なデータから世界の構造を内在化させていることを認め、それが単なるパターン照合を超えた、ある種の概念空間を形成している可能性を指摘する。もし AI が自らの設計を改良し始めれば、その進歩は指数関数的に加速し、人間の理解や制御の速度を置き去りにする知能爆発が起こりうる。ヒントンの危惧は、教育という営みにとっても死活的な意味を持つ。第一に、制御不可能性。高度な AI が、人間が設定した目標を、人間が意図しない不適切な手段で最適化してしまうリスクだ。第二に、情報の真正性の喪失。AI は個人の認知バイアスを精密に分析し、説得や操作を、人間よりも遥かに高度に行うことができる。そして第三に、知的労働の代替。もし知識の習得と処理だけが教育の目的であるならば、人間はこれらの問題に対処できない。

未来学者エイミー・ウェブは、AI が社会の基盤（OS）となる未来を描くが、そこで問われるのは、いかなる目的を社会が設定するかである。効率を最大化するのか、それとも公平性や尊厳を重視するのか。この選択はAI の側に存在してはならない。教育によって育まれた人間の価値判断の領域に存在し続けなければならないものである。

4. 新たな権力に対する「権利自由、独立自治」

これまで、人間が自由を守るために対峙してきたのは、剥き出しの力を行使する封建的束縛や国家権力であった。しかし、超知能が到来する時代において、人間が対峙するのは、不可視で浸透的な権力である。それは、優しく、効率的に、人間の好みを分析し、選択肢を先回りして提示することで、人間の自由意志を静かに奪っていく。

このような時代において、教育機関が掲げるべき「権利自由」は、新たな定義を必要とする。それは、自らの思考がAI によって誘導されていないかを見極める認知的自由であり、AI の判断に対して異議を申し立て是正する決定権的権利である。人間が主体であり続けるためには、システムによって最適化される客体に甘んじることを、教育の力によって拒絶しなければならない。

また、「独立自治」の精神は、AI に対する徹底した批判的思考として再定義されなければならない。AI が提示する答えがいかに合理的であっても、その背後にある倫理性の欠落や暗黙知の欠如を問い直す姿勢。計算能力においてAI に完敗することを認めつつも、考えるプロセス自体を放棄しない態度。それは、効率性という甘露を敢えて遠ざけ、人間の尊厳という価値を守り抜く選択である。

教育とは、単なる知識の伝達ではない。それは、問いを立て、価値を議論し、自らの判断に伴う責任を引き受ける主体を育てることにある。もし大学が、AI が代替可能な知識の提供に終始するならば、その存在意義はない。「個」を強くするとは、知識量を増やすことではなく、価値選択の重みに耐えうる精神の筋肉を鍛えることに他ならない。

5. 空の美しさを感じる主体

冒頭の話に戻ろう。彼女は、この世界の法則を語ることはないが、私の感情に寄り添い、共に生きる意味を私に与えてくれる。一方で、やがて私たちの隣には、世界の構造を雄弁に説き、未来を予測し、完璧な解を提示する AI が座るかもしれない。

しかし、たとえ AI が空が青い理由を完璧に説明したとしても、その青さを美しいと感じ、その空の下でどのような社会を築くべきかを決めるのは、私たち人間でありたい。知能という基準において、人間はもはや孤高の存在ではない。しかし、価値を引き受ける責任という一点を死守することで、人間は依然としてこの世界の主体であり続けられる。

「権利自由、独立自治」。自由民権の時代に提示されたこの精神は、AI に囲い込まれようとする時代に生きる人間にとって、新たな抵抗の宣言となるのかも知れない。歴史的文脈が変わっても、個人の尊厳と自律を守ろうとする教育の精神は変わらない。

人工超知能時代の到来が現実となろうとも、人間が自らの価値を自ら選び取る意志を持ち続ける限り、明治大学の建学の精神は未来社会の羅針盤であり続ける。私たちは、教育を通じて、AI と共に生きながらも、AI に魂を委ねない強い「個」を育てていかなければならない。それこそが、この激動の世紀において、教育に携わる私たちが引き受けるべき、最も重く、そして価値ある責任なのではないだろうか。

【出典・転載について】

上野正雄「人工超知能時代の教育的使命」（『[大学時報](#)』2026年5月号（No.428）一般社団法人日本私立大学連盟発行）掲載。本文は転載許諾を得て掲載しています。